

長野県大町高等学校 閉校式学校長挨拶

閉校式開催に際し、卒業式に引き続き、多数のご来賓の皆さまのご臨席を賜り、心から御礼を申し上げます。

長野県大町高等学校の歴史と伝統を引き継ぎつつも、次の時代にその発展を託してゆく式でございます。115年の歴史を持つ大町高校が一つの歴史を閉じることになり、さみしいことではありますが、悲しいこととはとらえたくありません。私たちが、生徒たちの新たな学習・教育環境を整えたいと考えて判断したことです。大町岳陽高等学校に向かって夢と希望を持ち、前向きに進んでいく生徒たちを心から応援したいと思っております。

平成21年度の第一期長野県高等学校再編計画に基づき、「地域とともに大町新校を考える懇話会」の開催は今年度まで19回の会議を開き、大町北高と大町高校の統合について話し合いを重ねてまいりました。校地校舎の位置や校舎改築、校名変更や生徒募集、さらには教育課程や進路指導の在り方等、地域説明会の実施を経て新たな学校づくりしてきました。両校の職員で設置しました新校準備委員会は、先月までに93回を数え、両校の伝統の継承と新校の学校運営を協議してきました。

三年前の平成25年4月、私が赴任した時を思い出します。私は本校の卒業生ですが、およそ四十年ぶりの旧校舎に入りますと木の香りや生徒達の足音に郷愁を感じました。とりわけ、三階の廊下から見えるアルプスの峰々は雄大で神々しく、今も昔も変わらぬ凜としたその姿に感動しました。豊かな自然の中で育み、その息吹を感じながら学校生活を送れる喜びを後世に伝えていくことの大切さを改めて感じることができました。

その6月に、50数年建った鉄筋コンクリート三階の旧校舎とお別れの日が来ました。当時の建物としては、近代的であり、床や壁は地元産のカラマツ材が使われていました。前庭の芝生の上で弁当を広げ、夢を語り合った昼休み、汗と涙でにじんだ体育館、思い出が詰まった教室まるでタイムスリップしたような気さえしました。校庭を埋めた仮設校舎へ引越の日、今日の卒業生が一学年の時です。生徒たちは、朝から決められたマニュアルによりそれぞれの持ち場で荷物を運んでくれました。教室の机椅子を運ぶ者、図書館の蔵書を段ボールに入れ運ぶ者、各研究室の書籍や書類、パソコン室のコンピューターを二人が向かい合いながら運んでいる者。ロッカーを台車に乗せ慎重に運び、置いたらすぐUターンして、次に運ぶ物を取りに行くため、狭い渡り廊下は長い人の列が続いていました。額に汗し、首にかけてタオルで汗を拭き拭き、小言ひとつ言わず動く生徒達には感謝のみでした。夕方、引越を終えた旧校舎に忘れ物はないかと点検に行くと、ガランとして何もなくなった校長室はやけに広く、

三人の女子生徒が膝をつき、雑巾がけしてくれていました。思わず「取り壊す校舎だから、掃除なんていいよ・・・」と言おうとしたら、ある生徒が「校長先生、何人の先生方がこの場所で仕事していたでしょうか。」と聞いてきました。「そうだな、人数はわからないけど、たくさん先生方がこの部屋で仕事をしてきたのだろうな。」と答えました。汚れこび付き、古くなった床を丁寧にふき取っている姿、母校の校舎に思いを馳せる生徒達の姿を見て、涙が出そうになりました。

一昨年の秋には、新しい管理特別教室棟が完成しました。玄関に入ると吹き抜けのラウンジが新校舎のコンセプトになっています。二階の生徒会室を含め生徒が自ら利用できる場所でもあります。新たな歴史や伝統を新しい校舎に作ってください。

大町高等学校は創立以来、地域の方々のご理解とご支援を得て、地域に愛されつつともに歩んでまいりました。本校の校訓である「魂知和（こんちわ）の精神」すなわち爽やかな挨拶は人間関係をつくり、自分の気持ちを伝え、相手の気持ちを理解することです。私の高校時代、昭和47・48年度の生徒会誌「白嶺葵」や校風委員会報の中で、「自由放任的な冷たさを加えていく世の中に唯一の暖かみを与えてくれるものそれは「あいさつ」。70年の良き伝統である。これを入学当初から習い、また下級生へと伝えてきた。あいさつがすべてではないだろうが、大町高のベストなるこんちわの校風だ」と記されております。

古き良き伝統を受け継ぎ、新しい歴史を作っていく、これまで長い間、大町高校を支え、その発展にご尽力いただいたすべての皆様に感謝申し上げますとともに、大町高校において培われた魂が脈々と引き継がれ、大町岳陽高等学校としての新たな伝統を築きながら、今まで以上に地域からの期待を集め、将来を担う有為な人材育成の場として、輝き続けるよう、温かく、時には厳しい目をもって見守っていただき、さらに一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。閉校の挨拶といたします。

平成28年 3月3日

長野県大町高等学校長 横川秀明